文献資料紹介

《第25回》

【大隅屋久島に於ける莪蒁の調整について】

山本秀雄（やまもと・ひでお）

大隅屋久島に於ける莪蒁の調整に就いて〈解説〉

昭和十一年の『植物学研究雑誌』第十二巻第十一号に、「大隅屋久島に於ける莪蒁の調整について」、という興味ある屋久島のガジュツ調整見聞記が掲載されている。筆者は東京大学医学部生薬学科教室の藤田路一、沈鶴鎮の両氏で、昭和十一年八月京都帝大田代善太郎講師をリーダーとした、屋久島実地指導会に来島した折、下屋久村船行に於けるガジュツ調査の記録である。

東大医学部生薬学科教室は、当時屋久島の農家に委嘱しガジュツの栽培試験地を設けていたのではないかと調査して見たが、地元では確かなところは何一つわからなかった。が、田代善太郎日記大正篇によれば、東大医学部の朝比奈博士は大正七年八月に屋久島の薬物調査に来島されており、後年生薬学科教室諸氏の来島となり、現在の恵命我神散原料のガジュツ乾燥法に助言を頂いたとも聞くとき、往事のガジュツ乾燥には大いに興味ある次第で、本文紹介に至った訳である。

さて興味ある昔のガジュツ調整法が、現今の乾燥作業と比較して如何に手の掛かるものであったか。

当時は、掘取り――洗滌――湯通し（二～三時間煮沸）――日乾と蔭乾（主に屋根裏に一～二ケ月間蔭乾）――除毛（充分乾燥の上桶に入れて丸太で攪拌して太い根の除去……それ以前は根を焼き切ったが品質が悪く値を落した）――のち磨きをかけて――出荷。すべて生産者が行う大変な作業である。

現在は、生産者の手で行うは、掘取り――除毛――水洗い（簡単に）、後は工場側で集荷――洗滌――スライス（厚さ二～三ミリ）――乾燥室（間接熱風循環方式＝約80℃七時間）で終了。尚工場乾燥室一回分で生物約八トンを処理しているし、農家作業も省力化が進んでいる。

それにしても、屋久島のガジュツは本文にある如く、当時国内の需要を充たしていたと言えば、今日も隣島種子島と共に全国消費の全量に近い生産地である。品質の勝れているためであろうから、一人ガジュツに止まらず、他の薬用植物にもこの豊かな自然を生かした栽培が出来ないものか、研究がまたれよう。（山本秀雄）

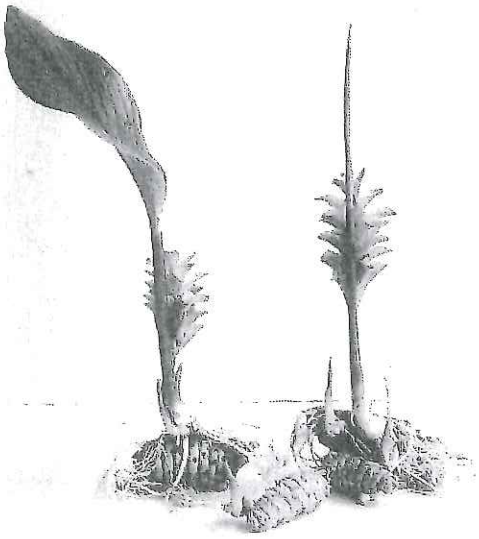
※原文はカナ・漢字文ですが、ひらがな表記に改めました。

大隅屋久島に於ける莪蒁の調整に就いて

藤田路一（ふじた・みちいち）
沈　鶴鎮（しん・はくちん）

以前から大隅屋久島で、日本国内の需要を充たすだけの莪蒁を産出するも、鬚根を火気にて焼き切るためその仕上品が穢いと言うことを聞いてもいたし、又過ぐる昭和八年八月、藤川福二郎氏が同島採集旅行の際持ち帰られた該生薬が教室に所蔵されてあるを見るに及んで成程と思って居たが、先般京都帝大田代善太郎講師をリーダーとする、九州植物同好会主催屋久島植物実地指導会に参加して調査する機会を得たので、その見聞した所を記して見たいと思う。

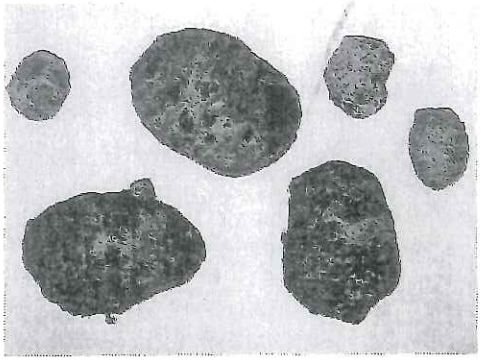
去る八月二日、屋久島安房港に到着。同行の原田利一、三ツ野間治両君と一行四人で、早速安房より最も近き栽培製造地船行――厳密に云うと鹿児島県熊毛郡下屋久村字船行――に赴いた。安房より人家一軒をも見受けられない海岸線を約一里東北へ走った処に農家点在し、区画整然と畑に、或は不規則に田の畦を囲んでクルクマ・ゼドアリア・ロスコ［Curcuma Zedoaria Roscoe＝ガジュツ］が栽培してある。大体に於てやや湿気ある処に栽培するものらしい。尚人家の湿地にはガジュツが同属のクルクマ・ロンガ・L［Curcuma Longa］ウコン］と共に、恰も半自生の如く生育しているのを見受けた。そこでガジュツの花はないかと丹念に探したけれども見当たらず――後で聞いたところが同地では開花は稀な由――唯ウコンの花のみは白色の苞葉美しく今を盛りと咲いていた。


▲ガジュツの花

同島では、現今各処に莪蒁の栽培が行われているが、土民の副業であって之を専業とするものはない。何れにしても大規模的な製造工程を採っていない。それは同島が海岸線間近より直ちに渓谷美、山岳美を具備した鬱蒼たる連山を重畳として形成している為に、僅に島の周囲のみが栽培地とされるに過ぎない為であろう。

扨て同島に於ける莪蒁の調整法の概略を述ぶれば、栽培翌年旧十一月に地下部を採掘し、充分水洗後、直径約一メートル・深サ約三十センチの鉄製の鍋に入れ、二～三時間煮沸する。此の目的は製造者の言によれば、生薬の香味を良好ならしむるためで、同時に太い根が抜かれ易くなるとの事である。しかる後、手を触れれば根がポキポキと折れる迄に乾燥する。其の方法は最初より晴天を利用して

日乾することあるも、通常は屋根裏の風通しの良き場所を選んで筵上に広げ、一～二ケ月の間風乾せしめたる後、更に晴天を利用して二～三日間日乾する。完全に乾燥し終れば根の除去に取りかかる。多量の時は桶に乾燥せる粗製の莪茲を入れ、丸き木製の棒を以て、芋の皮剝ぎ同様攪拌して根を除くも、少量の際は径約五十センチ・深さ約二十センチの「ショケ」と称する浅き笊に入れ、「アシナカ」と称する長サ約十三センチ・幅約十センチの殆んど円き小型の藁草履を両手に履き、前に置いた「ショケ」の中で、恰も女子が洗濯板を用ひて洗濯するが如き動作で、充分に摩擦して根を完全に除去する。



▲ひげ根を火気にて焼き切った以前の仕上品

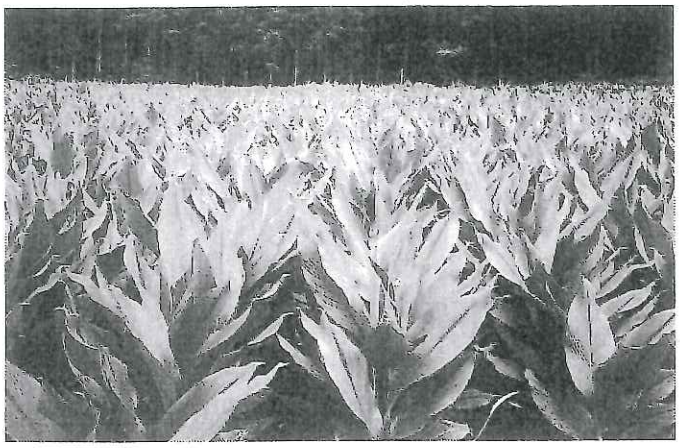
以前は藁を積み重ね、其の上に大体の根を取り除いた莪茲と藁とを交互に層積し、燻焼して鬚根を焼き切る方法を用ひたるも、かく操作する時は仕上品の色調悪しく上品とならないため、現時は実用しないで、専ら前述の何れかの方法により完全に細根を除くとのことである。細根を除いた後、所謂「ミガキ」と称して木灰と共に桶に入れ、丸き棒にて根を除去する際の様に攪拌操作して製品として仕上げる。

同島に於ける莪茲の年産額は約三千斤とのことで、筆者等の赴いた当時の小売値は、風乾しただけの粗製品が一斤二十八錢、「ミガキ」をかけ精製せるもの一斤三十五錢であった。

尚製造者の製品は一旦産業組合を経て、各市場、殊に大阪方面へ多く出荷されるとの事である。

序に一言すれば、前述の通り同島には諸処に恰も半自生状態で、相当量のウコンが人家附近に生育しているも、土地の住民は全然利用しないとの事である。

（一九三六年九月十四日、東京帝大医学部薬学科生薬学教室にて記す）



▲ガジュツ畑

〈補足〉

田代善太郎講師をリーダーとする屋久島植物実地指導会について、当時の「会員募集案内書」が、昭和四十七年十月一日発行の『田代善太郎日記』に見えているので、抄写してご紹介致します。

屋久島採集会＝（会員募集案内書）　昭和十一年

主催。九州植物同好会　「第五回植物実地指導講習会」

後援。下屋久営林署

講師。京都大学田代善太郎先生を招聘

主旨。〝多年熱望の屋久島に於て……〟、〝教育の実際化、郷土教育の高調せらるる今日、何卒奮って御参加下さい〟と呼びかけている。

日程。八月一日午後八時・鹿児島港九州商船待合室集合
午後十時出帆（奇数日出帆）

。八月二日午後〇時（又は三時）屋久島安房着
付近採集・安房宿泊

。八月三日：安房発→小杉谷斫伐所（八〇〇m）宿泊。

。八月四日：小杉谷→花之江川（一二〇〇m）宿泊。

。八月五日：宮之浦岳、永田岳採集、花之江川宿泊。

。八月六日～七日　［空らん］

。八月八日：安房付近採集、正午又は午後三時乗船。

。八月九日：午前五時半、鹿児島港着、解散。

申込受付。愛媛県立大洲中学校、山下幸平。

会員数　。約五十名。

会費　。四円。

費用　。汽船賃二等十円五十銭、三等七円（往復）。

。宿泊料八円四十銭（一泊平均一円二十銭、七泊分）。

。海上の関係で二日位余分に宿泊することあり。ほかに自動車賃、荷物運搬等二円位（登山は身軽にするため採集品は各地より下山せしむ）。

地図。陸地測量部五万分一屋久島四枚、二十万分一を一枚。

備考。宿泊地は山地なる故に胴巻等の用意が必要、雨具は必ず用意。〝屋久島は珍種多き故、採集多くなることと思います。充分新聞紙等の用意が必要です。前以て申込みあれば会にて用意致します。〟

屋久島植物の摘要

。植物分布上、沿海一帯は熱帯性の要素あり、八重山＝黒味岳（一八三六m）宮之浦岳（一九三五m）永田岳（一八九〇m）は九州最高の高山にして、寒地植物が分布しています。所産の植物名の一部を記します。

として、同日記には百二種の屋久島所産の植物名をあげている。

コブラン、ヤクシマコケシノブ、フササジラン、ヒメホウビシダ、ホウライイヌワラビ、ヒリウシダ、ホソバノコギリシダ、キノボリシダ、ヒロハノコギリシダ、ノコギリヘラシダ、ヤクシマクジャクシダ、コクマウクジャク、ツクシヒメワラビ、キンマウキノデ、オホイブキシダ、シマヤハラシダ、ヒロハアツイタ、アツイタ、ユノミネシダ、テツホシダ、キクシノブ、タイワンヒメワラビ、オホヘツカシダ、ホングウシダ、ホウビクゥンシュウ、シマアヲネカヅラ、ホコザキウラボシ、アリサンシダ、ヤリノホクリハラン、ヒメタカノハウラボシ……（以下略）